

# 定時制高校における「学び直し」の発生と変遷

伊藤 晃一

千葉大学大学院人文社会科学部研究科博士後期課程

「学び直し」という言葉が定時制高校の学びのあり方を示すものとして定着しつつあるが、実際には、どのような実践が行われているのであろうか。本稿では、定時制高校に勤務している教師たちにインタビューを行い、「学び直し」実践の実際を概観した上で、新聞記事を調査し、定時制高校における「学び直し」という言葉がどのように使用されてきたのかを明らかにした。またそこで得られた知見と定時制高校の歴史とを合わせて考察し、全日制高校の立て直し方略として注目されていた、義務教育課程の学びをドリル形式で行わせる「学び直し」実践が、「荒れ」が一通り収束した定時制高校においても有効であると考えられ、取り入れられたという仮説を立てた。今後の課題として、それまでの学びに傷ついてきたような生徒たちが一定数在籍する定時制高校においては、そこまでの学びをただやり直すだけの「学び直し」実践には問題があることを示した。

キーワード：定時制高校、学び直し、学校の立て直し方略、学びによる傷つき

## 1. 研究の背景

「学び直し」ができる学校—2019年12月現在、このような言葉が、定時制課程の高等学校（以下、定時制高校とする）を紹介する言葉の一つとして定着しつつある。全国の定時制高校のホームページ等を閲覧する限りでも、「学び直し」という言葉で各学校の取り組みを紹介するものが見受けられる。

文部科学省（2013）の中央教育審議会高等学校教育部会（第19回）の配布資料でも、「自分のペースで学べる定時制・通信制の教育は、不登校・中途退学経験者等への学び直しの機会の提供など、困難を抱える生徒の自立支援等の面でも大きく期待されるようになっている」〔下線は原文〕と明記されており、「学び直し」ができることが、現在の定時制高校の特徴の一つとして捉えられている<sup>1</sup>。

ここで用いられている「学び直し」には多様な意味が含まれており、学校によってもそれが指示するところや解釈は微妙に異なるが、大まかに述べれば「義務教育での授業に参加できなかったり、内容を理解できなかったりした生徒の学びをやり直す、あるいは途中で諦めてしまった高校での学びをやり直す」（伊藤 2017:96）といった意味合いがある。

本稿は、この定時制高校における「学び直し」という言葉について、その発生や意味の変遷をたどりながら、具体的な実践の課題を考察するものである。

## 2. 問題の所在

2.1. 定時制高校における「学び直し」実践の調査より  
まず、2019年現在、定時制高校において「学び直し」の名の下に具体的にはどのような実践が行われているのであろうか。

「学び直し」実践について各学校のホームページ等を閲覧できる範囲で概観すると、少人数で学べること、「基礎基本<sup>2</sup>」を学ぶ時間を設けてあること、T・T<sup>3</sup>（ティーム・ティーチング）の実施、授業時間外でも学習の対応時間を設けてあることなど、学ぶ環境において工夫する方策は見えて取れる。

しかし一方で、定時制高校における「学び直し」についての学術的な研究は十分とは言えない。山田（2016）は、全日制課程の高等学校のいわゆる「教育困難校」にて「学び直し」がどのように解釈され、実践されているかを調査し、そのような学校における学力保証のあり方を検討している。しかし、定時制高校の「学び直し」については、その歴史や具体的な実践の内容や方法の検討まで踏み込んだ議論は見当たらない。そもそも定時制高校における授業のあり方を論じるような先行研究も少なく、CiNii、J-STAGEでは「定時制 学び直し」と検索しても該当する実践論文は杉本ら（2013）の実践報告一件のみである。

そこで筆者は予備調査として、関東圏の定時制高校にて勤務する教師を対象に「学び直し」の実際を聞き取り、「学び直し」実践の傾向を明らかにすることを試みた。

調査方法としては半構造化インタビューによる聞き取り調査を採用し、該当する教師に対しては、1) 「学び直し」として取り組んでいる実践はあるか、2) 自身

Koichi ITO: Occurrence and Transition of "Re-Learning" in Part-Time High School  
Graduate School of Humanities and Social Sciences,  
Chiba University

はどのように「学び直し」を捉え実践しているか、3) これらを行うにあたり感じている課題はないか、を調査した。インタビューした教師の選定については、授業について熱心に取り組む様子がうかがわれる教師<sup>4</sup>のうち、五教科（国語、地歴・公民、数学、理科、英語）の教科担当者から選んだ。記録については対象者に研究の趣旨を話した上で許可を取り録音しているが、録音を苦手とする者に対しては筆者が話を聞きながらフィールドノートにメモを取った。

対象は4名である。表1にそれぞれ教員の名前は伏せ所属と担当教科のみ示した。なお、「夜間定時制」とは従来からの夜間に授業が行われる定時制高校、「昼夜間定時制」とは午前から夕方までの時間に授業が行われる昼間部と夕方から夜にかけて授業が行われる夜間部とがある定時制高校のことである。昼夜間定時制においては、昼間部と夜間部とで担当教員が異なるので、括弧内にその教員が所属する部を記載した。

表1 インタビューにおける対象者の所属と担当教科

対象者	所属	担当教科
A	夜間定時制	地歴・公民
B	夜間定時制	国語
C	昼夜間定時制（昼間）	英語
D	昼夜間定時制（夜間）	数学

それぞれ簡潔に説明する。

CとDからは、概ね同じような内容の回答があった。

以下両者に共通する回答内容を要約する。

この「学び直し」は、義務教育までの学びをやり直すという意味合いで使っている。

各教科担当者たちによる独自の問題集か、市販の問題集を用いて、それを生徒たちに解かせる。内容は義務教育で学ぶことを難易度順に（簡単なものから難しいものへ）細かくステップに区切られ構成されているドリル形式のものである。それらを順に解いていけば、生徒たちは自身がそれまでの学びのどこでつまづいたのか分かるようになっている。またそのつまづきを教師も把握しやすくなる。

この問題集は各授業の冒頭や「0時限」と呼ばれる正規の授業の開始前の時間<sup>5</sup>や「総合的な学習の時間」の中で行われる。なお、これらの取り組みの効果はまだ検証中の段階であるが、保護者からの評判もよく、継続して行なっていく予定である。

両者の回答の異なる点については、Cの取り組みは、学校の取り組みとして上記の実践を行うものであり、D

の取り組みは、「学び直し」という言葉が学校の取り組みとしてうたわれているものの、個人の判断で授業中に上記の取り組みを行うものであるという点である。

A、B、Cは、自身が担当する授業の中で、独自の「学び直し」実践を行なっている。

Aは、科目「現代社会」の中で、新聞や雑誌に掲載されている新しいニュースを教材に生徒たちに様々に問いかけ、生徒たちからの回答や質問からさらに学びを展開させるような授業をしており、それが「学び直し」を意識した実践であると言う。Aはいつも授業を「一から」、すなわち基礎知識やこれまでの学びの前提なしではじめることを意識しており、学ぶことは常に「学び直す」ことだと考えていると言う。

Bは、日本語の歴史をたどることを軸として国語の授業を再構築し実践していると言う。それまでの生徒たちの成績は関係なく、誰にとっても新しいことを学ぶことになるという意味で「学び直し」を意識した実践であると言う。

Cは、ペアワークを取り入れ、生徒たちの英語との「出会い直し」を考え授業をしている。ここでいう「出会い直し」とは、それまで生徒たちが一斉授業で英語を学んできたことを踏まえ、少人数クラスであることを生かし、英語による対人コミュニケーションを実践的に学ぶことを通して、それまでとは違う新しい英語の魅力に出会うことを指す。

調査結果から、「学び直し」の実践は次の3つの傾向に分けられる。

- ① 学校の取り組みとして、義務教育の復習ができるドリル形式の問題集を解かせるもの
- ② 各自が授業において、義務教育の復習ができるドリル形式の問題集を解かせるもの
- ③ 教師自身の教育観に基づいて「学び直し」を解釈し、授業を行っているもの

本稿ではこれらのうち、2019年現在の定時制高校の「学び直し」実践の一つとして考えられる①及び②の実践を主な検討、考察対象として取り上げることとする。①及び②は、学校の取り組みとして行なっているか授業担当者個人の判断で行なっているか、という違いはあるが、実践の実際としては同様の取り組みであると言える。

本来であれば③についても、実践例をさらに集めたり、傾向やそれぞれの実践の課題を詳細に検討したり、①及び②との関係を調べたりすべきであり、そのことが定時制高校における教育実践全体を考える上でも意味を持つと考えられるのだが、調査に膨大な時間がかかるため、このテーマについては別稿に譲ることとしたい。

## 2.2. 定時制高校における「学び直し」実践の課題

それでは、①及び②についての課題を予備調査から読み取れる範囲で示していこう。

数学教師 D は、「数学 I」（主に<sup>6</sup>一年生を対象にした数学の科目）の冒頭に、他校の定時制高校教員が作成した「学び直し」のドリルを解かせ、その後高校の教科書を用いて問題演習を行っている。問題演習を行ううちに、「学び直し」のドリルで取り組んだ箇所が出てくることがあり、「学び直し」と高校の授業をつなげられるという。

その一方、D は次のような課題を述べる。

本当は、冒頭の 15 分のドリルでは、誰がどこまでどのようにできていないのか分かっていない。もし丁寧に指導したいなら「公文式」のように、問題を解かせて持って来させて、その子に応じて指導するしかない気がする。でも、そのようにすると高校の授業はもうできない。「学び直し」のドリルをすることで生徒たちをなにか騙している感じがする。

(2017年9月28日フィールドノート)

ここで D の言う「公文式」とは、生徒たち一人ひとりの進捗状況に応じて、ステップ方式のドリルを解かせることを意味している。進捗状況に応じてドリルを解かせることによる「騙している感じ」とは、この「学び直し」実践が高校の学びと明確には繋がっていないにも関わらず、それを生徒たちに、ただ解かせていることにあると D は言う。

これは、このような「学び直し」実践が生徒たちにとって、一体いかなる学びの場になっているのか、という観点から、非常に重要な指摘であると思われる。果たして、このような「学び直し」実践は、定時制高校の生徒たちの現状に即して妥当なものなのだろうか。

ところが、このような課題について言及している先行研究は、筆者が調査する限りにおいて見当たらない。

## 2.3. 研究の意義

このような定時制高校の「学び直し」実践における課題を明らかにするべきである。

「学び直し」は学術的な概念ではない。定時制高校における「学び直し」は外部に向けての分かりやすいアピールポイントとして機能しているただの言葉で、それを検討することに意味はないという意見もあるかもしれない。しかしそれには検討の余地があるだろう。

現に、現在の定時制高校では「学び直し」の名の下に、日々具体的な実践が行われている。「学び直し」やそれに関わる実践についてこれまで深く検討、考察されてこなかった現状を鑑みると、「学び直し」という言葉が、

現場にそれとなく受け入れられる何らかの理由があったのだと考えられる。それではそれは一体どのような理由なのか。

それを考察するためには、やはり「学び直し」という言葉が発生し、使用されてきた経緯を検討するほかないだろう。「学び直し」及びそれに関わる実践がどう発生し変遷したのか、このことを丁寧に分析することにこそ、現在の定時制高校教育のあり方を考察する重要な契機があると考えられる。

本研究は、定時制高校という特色ある学校の教育実践のあり方を問う研究として示唆を与えるものになりえ、さらに言えば、学校での学びに対してうまく対応できない学習者たちへの教育的アプローチの研究にも寄与すると考えられる。

これらの問題意識から、次のように研究の目的と方法を設定する。

## 3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、現在定時制高校でうたわれている「学び直し」の発生と変遷をたどりながら、具体的な「学び直し」実践にどのような課題があるのかを明らかにすることである。

調査の内容は、次の二点である。

第一に、新聞記事の語句検索を用い、キーワードとなる語句が使用される文脈とその傾向を調査することである。具体的には、定時制高校において「学び直し」という言葉がどのような文脈において用いられてきたかを整理し、その上で定時制高校の歴史と照らし合わせながら、その発生と変遷の解釈を試みる。第二に、現在定時制高校で行われている「学び直し」実践のモデルを調査した上で、それに深く携わった者に対して半構造化インタビューを行うことである。またその内容を解釈し、実践の背景を把握した上で、それがなぜ定時制高校で行われているのかを考察する。

第一の研究方法は、次の手順で行う。

- ① 新聞記事の検索サービスを用い、「定時制」と「学び直し」の両方が該当する記事を収集する。なお調査する新聞は、朝日新聞、読売新聞の二紙とし、検索サービスは、それぞれの新聞データサービスである「聞蔵Ⅱ」、「ヨミダス」を利用する。
- ② 収集した記事を大まかに分類し、その傾向を明らかにする。
- ③ 収集した記事の内容分析を行い、具体的に定時制高校における「学び直し」がどのような文脈において用いられてきたかを整理する。
- ④ 得られた結果をもとに定時制高校教育の歴史と照らし合わせ、定時制高校における「学び直し」概

念の発生と変遷の解釈を試みる。

第二の研究方法は、次の手順で行う。

- ① 定時制高校における「学び直し」実践のモデルと考えられる実践を文献調査する。
- ② 該当のモデルに深く携わった者へ半構造インタビューを行う。
- ③ インタビュー内容を整理し定時制高校における「学び直し」実践との関係を考察する。

## 4. 調査

### 4.1. 新聞記事に掲載されている定時制高校における「学び直し」概念の発生と変遷についての調査

新聞記事において「学び直し」という言葉が初めて出るのは、1984年10月の朝日新聞の記事であり<sup>7</sup>、社会人教育の文脈の中で用いられている。この時期の「学び直し」は、社会人としての学び直しという意味合いで用いられていることに留意されたい。

新聞記事の検索サービスで「定時制 学び直し」で検索をかけたところ、朝日新聞で71件、読売新聞で35件該当した。そのうち、朝日新聞においては3つの記事において内容の大部分が重複しているものが見つけられたので、実際の分析対象としては68件とした。

表2において、10年ごとに各新聞の記事が何件該当するかを示した。

表2 10年毎の各新聞における「定時制 学び直し」で検索した該当件数

年代	朝日新聞	読売新聞
1980~1989	1	1
1990~1999	1	0
2000~2009	21	4
2010~2019 現在	45	30

1980年代では該当記事が二件確認されるが、一つは、定時制高校教師が大学で「学び直し」をしたという文脈で用いられている<sup>8</sup>。もう一つは、夜間中学で「学び直し」、定時制高校に進む者もいると言う記事であり<sup>9</sup>、両者ともに定時制高校生における「学び直し」の記事ではない。また1990年代に一件ある、1995年の朝日新聞の記事も、工業高校機械科の36歳の学生が、卒業した後、社会人として会社で基礎的な知識を「学び直し」たいとする社会人としての「学び直し」の意味合いで用いられており、定時制高校における「学び直し」の記事ではない<sup>10</sup>。

定時制高校における「学び直し」の記事が増化するのは2000年代からである。2004年には、定時制高校に

入る生徒層として「不登校の経験者や学び直したいという中高年者らが増え」<sup>11</sup>という表現があり、「学び直し」を不登校経験者ではなく、中高年者の学びのやり直しという意味合いで用いる記事があった。また、2006年には、定時制高校への入学を広く勧める文脈において「退職された方の中にも、学び直しの意欲を持っている方がいらっしゃるのではないのでしょうか」<sup>12</sup>との表現があり、社会人が改めて高校や大学や会社で「学び直し」をするというような、いわば年齢を問わずに、(高校以上の)学びという営みに参加するというような意味合いで用いられる「学び直し」の記事が見てとれた。

新しい傾向が見出されるのは、2006年の読売新聞の記事である。「教育ルネサンス」という連載記事においては、「学び直しの学校」というタイトルで様々な学校が取り上げられ、その連載9回のうち4回が定時制高校についての話題であった。そのうち第一回目は「不登校経験者や高校中退者が通いやすい体制の都立高校」として「チャレンジスクール」が取り上げられた<sup>13</sup>。ここでは、何らかの理由で義務教育の中で不十分になった学びをもう一度やり直す、という意味合いでの「学び直し」が用いられた。

その後2008年には、「不登校や高校中退を経験した人たちの『学び直し』の場」<sup>14</sup>という表現や、「最近の多くは『中学時代に何らかの理由でつまずき、学びなおしたい』と入学してくる生徒たち」<sup>15</sup>とする表現が現れ、「学び直し」の表現が中学までの不登校経験者に用いられる記述が増えてくる。それ以降も「学び直しにくる元不登校の生徒」<sup>16</sup>や、「様々な事情を抱えて不登校だった生徒を中心に学び直しの生徒(中略)が在籍」<sup>17</sup>など、義務教育の内容を学び直す「学び直し」の意味合いが度々用いられるようになる。

特筆すべきは2014年11月の読売新聞大阪朝刊の記事である。ある定時制高校の閉校に際し、その定時制高校の歴史を振り返る記事の中で、「平成に入ってから、中学時代に不登校やひきこもりに悩んだ生徒や、学び直しをする社会人らを受け入れるようになった」<sup>18</sup>と書かれており、2000年代前半あたりまでは、「学び直し」という語は、現在使われているような、義務教育での不登校傾向にある生徒たちを対象としたものではなく、高校での学びをやり直したい社会人を対象としたものであったことがうかがわれた。

各都道府県によっても「学び直し」の解釈が微妙に異なることから、「学び直し」の意味の変遷については曖昧な点が残るが、これら新聞記事の調査を通して示唆されたことを次のように整理しよう。

- ・ 新聞記事においては、「学び直し」という言葉自体は、少なくとも1980年代より前は用いられてお

- らず、定時制高校の文脈でも用いられてはいない。
- 2000年代前半までは、定時制高校の中でも、社会人学生、中高年の学びのやり直しに対して「学び直し」という言葉が使われていた。そこでの「学び直し」には「年齢を問わず、高校での学びに参加する」といった意味合いがあった。
  - 2000年代後半より、定時制高校に在籍する義務教育での不登校経験者たちのための「学び直し」に関する記事が増えた。そこでの「学び直し」には「義務教育での学びをやり直す」という意味合いがあった。

#### 4.2. 新聞記事調査を受けての考察

このような整理を受け、(ア)「学び直し」に関する記事は2004年(朝日新聞)が初出であるが、なぜそれまで定時制高校において「学び直し」という言葉が出てこなかったのか、(イ)なぜ2000年代後半より「学び直し」という言葉に「義務教育での学びをやり直す」という意味合いが含まれるようになったのかを、それぞれ定時制高校の歴史に照らして考察していこう。

まず(ア)について考察する。

そもそも定時制課程は、「中学校卒業と同時に、境遇上社会に出て働かなければならない青少年に、高等学校教育を受ける機会を保障するため、昭和二三年四月、全日制課程と同時に発足した」(尾形ら1967)課程である。しかしその後、働きながら学ぶ、いわゆる「勤労青年」の数は減少し、現在は「従来からの勤労青年のための教育機関としての役割だけでなく、多様な学びのニーズへの受け皿としての役割を増している」[下線は原文](文部科学省2013)。

まず、新聞記事にて、定時制高校での「学び直し」が言われるようになった2000年代前半は、定時制高校においてはどのような時期であったのだろうか。

板橋ら(2007)は、この時期の定時制高校の特徴を、「勤労青少年教育の終焉と新しいタイプの定時制高校」(p.204)と章立て、チャレンジスクール(東京都)、パレットスクール(埼玉県)、フレックス・ハイスクール(栃木県)などの新しいタイプの単位制の定時制高校の登場を紹介している。

(ア)についていえば、一つの考えとして、それまでの勤労青年の学びの場であったころの定時制高校では、あくまでも、生徒は高校において高校での学習をするであり、そこでの学びをやり直すといった意味合いでの「学び直し」という言葉は必要なかったのではないかと考えられる。

板橋らによれば、1989年の高等学校学習指導要領から、定時制高校は、勤労青年の学びの場に加え、「生涯学習の機会拡大」を目指しており、「勤労青年のほか、

多様な入学動機をもつ者、生涯教育の一環としての学ぶ者など」(p.196)にも開かれていた。しかし時代とともに生徒像も変容し、新しいタイプの定時制高校の登場などによって、2000年代前半に新たな気風が生まれたのだと言えるだろう。

さて、上述の新しいタイプの定時制高校は、定時制高校が「全日制に合格できない者、ハンディキャップを持った者、全日制中退者、不登校者、外国人の学習の場等として新たな役割を持ち始めた」(p.204)ことから発想された学校であり、社会人学生より、全日制に通う高校生と同じくらいの年齢の生徒の入学が想定されていた。社会人学生、中高年の学びのやり直しとしての「学び直し」についても、そのような生徒たちの登場により、意味が変容していくことがうかがわれる。

次に(イ)について考察する。

「学び直し」が、「義務教育での学びをやり直す」という意味合いで用いられ始めたのは2006年(読売新聞)である。それでは、なぜそのような変化があったのだろうか。

筆者による定時制高校教員への聞き取り調査によれば、地域によって多少の違いはあるものの、90年代後半から2000年代中頃までの間に、定時制高校は、いわゆる「荒れ」を経験している。しかし2000年代後半、「荒れ」は一通り収束の兆しをみせ、義務教育での不登校経験者たちが定時制高校に多く入学するようになったと言う。

先に述べた「学び直し」の意味の変化は、このような定時制高校教育における一つの潮目の時期と重なる。「荒れ」が一通りの収束をみせ、定時制高校の中でも義務教育での不登校経験者が強く意識されるようになったという背景の中で、当初、社会人が「高校での学びに参加する」とする意味合いでの「学び直し」は、徐々に「義務教育での学びをやり直す」という意味合いでの「学び直し」の意味合いまで含むようになっていったのだと考えられる。

#### 4.3. 「学び直し」実践モデルについての調査

それでは、本稿で問題としている定時制高校で行われている「学び直し」実践、すなわち義務教育の復習ができるドリル形式の問題集を解かせる実践は、いかにして発生したのかを探ろう。新聞記事を調査する限りでは、定時制高校で行われている「学び直し」実践は、特定の定時制高校によって開発された実践なのではなく、徐々に定時制高校における教育方法の一つとして定着していったことが読み取れる。それではこのような実践を定時制高校以外に実践したところはないのか調べてみよう。

まず注目したいのは、全日制課程の高等学校(以下、

全日制高校とする)の教育困難校における「立て直し」方略の一つとして注目された「学び直し」実践である。

千葉県立姉崎高校において平成16年(2004年)から行われた、「学び直し」という名前の実践がある。この実践を通じて、そこまで教育困難校であった姉崎高校の立て直しを図ったという記録が残っている(白鳥2015)。そこでは、厳格な生徒指導に加えて「義務教育初級段階の学力が身につけていない生徒」(p.34)に対応するために、「ステップ方式」と呼ばれるドリル形式の教材が作られ実施されていた。この実践を進めた当時の校長である白鳥は次のように述べている。

生徒の集中力の限界を一〇分から一五分と考え、この時間内で消化できる学習内容と分量を「一つのステップ」とし、これが終了すれば次のステップの教材を与える方法で、三つのステップ「基礎・標準・応用」の三段階の教材を用意しました。(p.34)

要するに、この「学び直し」実践では、義務教育の内容を順序立て細かく分けて、それを生徒たちに次々と解かせたのである。

この実践は、現在の定時制高校における義務教育の内容をドリル形式で解かせる「学び直し」実践と重なる。白鳥の実践は、平成16年(2004年)から平成23年(2011年)まで、多くの新聞報道等で多く取り上げられたり、多くの学校関係者の訪問を受けたりと(pp.104-117)、当時一定の影響を持ったと考えられる。また平成20年(2008年)学習指導要領改訂案の中に「義務教育段階の学習内容の確実な定着を図る」と明記されたことから、その取り組みが全国的に注目されるまでになり、千葉県をはじめ全国の全日制的教育困難校等、義務教育段階での学びに不安がある生徒たちが在学する高校において同様の取り組みがなされることとなった<sup>19</sup>。また白鳥自身が、このような「学び直し」実践は、姉崎高校が最初に取り組んだものであると述べており、彼自身全国各地でこの取り組みについて講演し、ある県の定時制・通信制の教員を対象に講演をしたとも述べている。

ここまで詳しく姉崎高校で行われてきた「学び直し」実践を追ってきた。では次に、姉崎高校以外にも、このような実践を行なった定時制高校以外の高校があるのか調べてみよう。先ほどと同様、朝日新聞、読売新聞の二紙のそれぞれの新聞データサービスである「聞蔵Ⅱ」、「ヨミダス」を活用し、「学び直し」と「高校」の両方が該当する記事のうち、特に、定時制高校における「学び直し」の意味合いに変化の見られた2000年から2009年までの記事を収集し、上述のような義務教育の復習を行わせる実践があったのかどうかを調査する。

読売新聞では、54件ヒットしたうち、高校にて、義務教育の復習を行う意味合いで「学び直し」を扱っている記事が6件あった。このうち、定時制高校での取り組みを扱っているものが2件、通信制の高等学校(以下、通信制高校とする)での取り組みを扱っているものが1件、全日制高校での取り組みを扱っているものが3件であった。

通信制高校を扱った記事では具体的な方法は明示されず「国数英を中心に中学校の基礎から学ぶ課程」が設けられていることが述べられていた<sup>20</sup>。

全日制高校の取り組みの中で、姉崎高校における実践記事1件を除くと、2004年1月の記事として埼玉県で「中学校までの学習内容を改めて勉強する「学び直し」を正規の課程に組み入れる高校を指定する方針を固めた」とする記事と、2006年5月の記事として東京都の「エンカレッジスクール」の取り組みを取り上げた記事があった。エンカレッジスクールとは、小中学校で力を発揮できなかった生徒を対象にした学校で2003年からはじめられた学校である。

埼玉の実践については具体的な実践の方法は述べられていないものの、「高校の課程と並行して、これまでの学習を振り返り、どこでつまづいたかを洗い出す。必要に応じて小学校や中学校で習った漢字の読み書きや計算なども学習し直す」という記述が見られ、東京都のエンカレッジスクールでの取り組みは「生徒たちが小学校時代のどこでつまづいたか確認しながら」進め、「十数人の少人数・習熟度クラス。集中力が切れないよう「30分授業」を行い、つまづいた所までさかのぼる」といった記述が見られた。

朝日新聞でも76件ヒットしたうち、義務教育の復習を行う意味合いで「学び直し」を扱っている記事が6件あり、読売新聞と同様の傾向が見られた。

新聞記事を通して見てきた実践は、姉崎高校の「学び直し」実践のようにドリル形式で行うことは明記されていないものの、義務教育の内容を細分化し、解かせ、生徒たちの「つまづき」を把握したり、短い時間で組みませたりする点で共通していることが分かる。

このようなことを踏まえると、定時制高校における義務教育の内容をドリル形式で解かせる実践は、全日制高校の、いわゆる教育困難校での取り組みの一環として実施された「学び直し」実践を踏襲あるいは参考にしたものであるという仮説が立つ。

そこで筆者は、この全日制的教育困難校の立て直し方略としての「学び直し」実践をより詳細に調査するために、この実践に深く携わる者へのインタビューを試みた。インタビューの相手は、「学び直し」実践の方法を具体的に述べている、当時姉崎高校の校長であった白鳥秀幸である。インタビューは2018年9月20日に行った。白

鳥には趣旨を説明した上で、フィールドノートにメモを取りながら行った。鉤括弧内の白鳥の発言は、取材中にとった筆者のノートから抜粋している。

白鳥は、なぜこのような実践に取り組んだかについて次のように述べている。

義務教育での学習が十分にできなかった生徒たちにとって、知識は「分断」されており、「点」でしかない。しかしこの「学び直し」実践で、このようなステップを踏むことでそれが「線」になることを期待した。「断線」した知識の線を「つなげる」ことが「学び直し」である。

白鳥は、知識を線としてつなげていくことが学びであるというイメージを持ち、義務教育での学習が不十分な生徒に対して「学び直し」実践をつくっていったと言える<sup>21</sup>。

この「学び直し」実践は、本稿 2 章で述べた定時制高校における義務教育の復習ができるドリル形式の問題集を解かせる実践と重なるところが多い。また、姉崎高校で取り組まれた「学び直し」実践の時期は、先に述べた定時制高校における「学び直し」の意味の変化した時期とも重なっている。

姉崎高校をはじめ特定の全日制高校の「学び直し」実践に影響を受けたことを明記している定時制高校はないものの、これらのことを総合的に踏まえるならば、白鳥らが取り組んだ全日制高校立直し方略としての「学び直し」実践や、それに類するような、全日制課程で行われた「学び直し」実践が、時を同じく注目されていた、不登校生徒の受け皿としての定時制高校がうたっていた「学び直し」と繋がり、定時制高校に同様の実践が広まったのではないかと考えられる。

## 5. 考察

定時制高校における「学び直し」実践の発生とその変遷を追いながら、現在定時制高校で行われている一般的な「学び直し」実践モデルの一つになりうる実践を紐解いてきた。

ここでは、全日制教育困難校における立直し方略としての「学び直し」実践が定時制高校にも影響を与えた可能性があるという立場に立ちながら、定時制高校における「学び直し」実践の課題を考察する。

全日制高校における教育困難校の立直し方略としての「学び直し」実践を、定時制高校が参考にしてきたとするならば、それは一定の理解ができるものである。義務教育での不登校経験者は、やはり義務教育で教わる学習が不十分であると考えられ、そのような生徒たちに

は、それまでの学びをやり直させるべきであるという考えがありうるからである。また白鳥が言うような、知識を連続した線で捉えるような学習観に立つならば、何らかの理由で「断線」してしまった知識を「つなげる」ために、義務教育の内容を細かく順序立てて分けて、生徒たちに解かせるような「ステップ方式」が採られたことも理解できる。実際にこのような取り組みで、それまで分からなかったことが分かるようになったり、学校生活に前向きに取り組めるようになったりした生徒も一定数いると思われる。

しかし一方で次のような課題もある。

本稿 2 章 1 節の予備調査の中で、上記の「学び直し」実践を行なっている D は、これらの学習が、その後の実際の高校との授業に、必ずしも結び付けられていないと述べていた。これは、義務教育の問題を「ステップ方式」で学ばせた後、正規の高校の授業を行う際、その「学び直し」実践と高校の授業が毎回つながっているわけではなく、結局高校での学習に役立ってはいないのはいか、という指摘であった。

もしこのようなことがあれば、「学び直し」実践は再考を迫られるはずである。なぜなら「断線」してしまった知識を「つなげる」ために行われているはずの学習が、逆に学びの大きな「断線」を生む装置として機能していると考えられるからである。

また、「学び直し」をする生徒たちの心情については、どのように考えるべきであろうか。

たとえば、たとえそれまでの学習が不十分であったとしても、高校生を相手に、それまでの学習に参加できなかったという理由で、ただ義務教育の学習内容を取り組ませるということが、その生徒にとって学ぶ意欲を起こさせるものになりうるのだろうか。出来ないからといって、そのようなドリルを解かされる生徒の気持ちは、考慮されなくてもよいものなのだろうか。

あるいは、そのような「学び直し」実践を経ても、なおできないような生徒たちはどうすればよいのだろうか。ステップ方式のような実践を経て、ある問題は解けるようになったが、その過程の中で学ぶことがより嫌いになるような生徒もいるのではないだろうか。

かつて定時制高校の生徒たちの授業の受け方について考察した筆者、伊藤 (2016) は、生徒たちへのインタビューを通して、生徒たちが、実際に学校にいながら、学校では実質学ばず、「単位をとることを最大の価値とし、その必要条件である授業への参加を必要最低限の努力でやりすごす」(p.7) ゲームをしているのだと指摘し、それを「単位とりゲーム」と名付けた。また、生徒たちそのようなゲームをプレイしてしまう背景には、次のような理由が考えられると述べた。

定時制高校の生徒たちの中には、学校の外だけでなく学校の中でも自分の本音が出せない者もいる。教師から「先生」として関わられることも苦手で、それゆえ何かを学校的に学ぶことそのものにネガティブになっている者もいる。しかし現実には彼・彼女たちは学校に在籍しており、時には無理にでも学ばなければならない。結果として、生徒たちはいやいやながらも学校で学ぶという選択肢を選ばざるを得ない状態になる。しかしそのような中で無理に学ぼうとすれば、この生徒はまた傷ついてく。生徒たちは、私たちが考える以上に、複雑に幾重にも傷つき、苦しんでいる可能性がある。(p.139)

「学校的に学ぶことそのものにネガティブ」になっている生徒は、その「傷」をより深めないために、「単位とりゲーム」をせざるを得ない。「学校的に学ぶことそのものにネガティブ」な生徒が無理にでも学ぶことによって、傷ついてしまうことを、暫定的に「学びによる傷つき」と呼ぼう。

現在定時制高校で行われている「学び直し」実践は、学習者の「学びによる傷つき」を果たして考慮しているだろうか。それまでできなかったから「学び直し」をする——見当然のように思えるこのような考え方も、それまでの「学びによる傷つき」を経験してきたような生徒たちが一定数いると思われる定時制高校においては慎重に配慮されるべきことではないだろうか。現状の定時制高校における「学び直し」実践は、「学びによる傷つき」が浅くしか考慮されていないのである。

## 6. 今後の課題

本研究では、定時制高校における「学び直し」の歴史解釈についてまだ不十分な点が残る。

例えば、2000年代前半より以前になぜ定時制高校では「学び直し」という言葉がそこまで使用されていなかったのか、という点については今後さらに研究する必要がある。

また「学び直し」実践についても、その発生についてルーツの一つしか提示出来ていない。

「学び直し」実践に変わる新たな実践を提案するとともに、「学び直し」実践をさらに多角的に考察することを今後の課題としたい。

1 通信制の課程の高等学校でも「学び直し」の機会の提供が期待されている。したがって通信制高校における「学び直し」実践の検討も重要な課題である。本稿ではこのテーマについては検討しないが、その独自性や定時制高校の「学び直し」との関連等、いずれ別稿にて研究成果をまとめた。

2 学校の特色によって異なるが、基本的には義務教育で学ぶ、読み・書き・計算を指す。

3 複数の教師が協力して授業を行うこと。ここでの事例の多くは、一人の教師が授業を進め、もう一人が個別にサポートが必要な生徒をサポートすることを指す。

4 広く教育に関する研究会や勉強会に参加し知見を得ようとしている者や、長年定時制高校教育に携わり意見を発信しているような者を選んだ。

5 たとえば、午後5時20分から正規の授業が始まる場合、4時半ごろから行われることがある。

6 「主に」と書いたのは、その高校は単位制の高校であり、それまでに何らかの理由でその授業の単位を落とした上級生も(数は少ないが)受講しにくるからである。

7 朝日新聞朝刊2面「社内教育の理由 あてにできぬ学校(リポート 教育改革:7) (1984年10月15日)

8 朝日新聞朝刊栃木「不況飛び越え高校生巣立つ 県立高校で卒業式 /栃木 (1995年3月2日)

9 読売新聞東京朝刊都民「59歳も“卒業の春” 夜間の東京・荒川九中で激励会 (1988年3月19日)

10 朝日新聞朝刊栃木「不況飛び越え高校生巣立つ 県立高校で卒業式 /栃木 (1995年3月2日)

11 朝日新聞朝刊教育1「定時制高校 夜の学びや進む統廃合(転機の教育) (2004年1月6日)

12 朝日新聞朝刊オピニオン2「(声) 単位制高校で学び直しては (2006年1月6日)

13 読売新聞東京朝刊教育Ap「[教育ルネサンス] 学び直しの学校(1) 再挑戦の支援、試行錯誤(連載) (2006年5月16日)

14 朝日新聞朝刊2経済「(公貧社会 支え合いを求めて) 千葉・東京ベイエリア:5 定時制やり直しの道険しく (2008年8月9日)

15 朝日新聞朝刊石川全県・1地方「『経済的事情』から『学び直し』の場に 定時制高校・七尾城北が創立60周年/石川県 (2008年11月21日)

16 朝日新聞夕刊こころ1面「『まぜこぜ』で輝く個性 兵庫のベテラン教諭 障害者雇用促進で取り組み (2009年6月27日)

17 朝日新聞朝刊オピニオン2「(声) 定時制、入学も就職も厳しく (2010年5月11日)

18 読売新聞大阪朝刊阪神「きょう最後の川高祭 67年分のありがとう OB、恩師 歌や獅子舞=阪神 (2014.11.01)

19 たとえば日本経済新聞でこの「学び直し」実践が取り上げられ、全国から多くの視察があったということである。白鳥(2015)には「三一〇校」(p.62)が訪問したと記載されている。

20 読売新聞東京朝刊仙台「通信制高校 学び直す不登校・中退者 基礎学力対策に準備課程設置=宮城 (2006.6.12)

21 白鳥自身は、この「学び直し」実践の背景に、自身が小学校教員の経験があったことや、交流人事で中学校教員が姉崎高校に入ったことが大きく影響していると述べている。この点については本稿では踏み込まないが、この「学び直し」実践が生まれた背景として留意しておきたい。

## 引用文献

- 板橋文夫・板橋孝幸(2007)『勤労青少年教育の終焉 学校教育と社会教育の狭間で』随想舎、2007年
- 伊藤晃一(2016)「授業というゲームをどう変えるか —ある定時制高校で行われた授業をたよりに—」、人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書、第306集、教育におけるゲーミフィケーションに関する実践的研究、pp.1-15
- 伊藤晃一(2017)「第II部 「授業づくりの闇にともす光—ある夜間定時制高校での挑戦」、『授業づくりをまなびほぐ



- 
- す ここからはじめるクリエイティブ授業論』阿部学・伊藤晃一 静岡学術出版、2017年、pp.70-141
- 白鳥秀幸 (2015) 『「学び直し」が学校を変える！ 教育困難校から見た義務教育の課題』日本標準、2015年
- 杉本ゆか・齋藤理一郎 (2013) 「定時制高校の「学び直し英語」実践報告」関東甲信越英語教育学会誌 27(0) pp.141-153
- 長尾利雄・長田三男 (1967) 『夜間中学・定時制高校の研究』校倉書房、1967年
- 文部科学省 (2013) 文部科学省中央教育審議会高等学校教育部会 (第19回) 資料 2-1  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336_1.pdf)  
(2018年10月30日確認)
- 山田朋子 (2016) 「「教育困難高校」の特色化に関する一考察 - 「学び直し」のあり方に着目して-」日本学習社会学会年報第12号、pp.55-65